

孔宙碑

江

此碑在孔宙墓前，得此碑於京陵王氏後，
 山陰章氏余出守惠州時適有友人
 訪以碑見示，初譚
 終日結為金石契，細察其文，見其
 色淋漓，尚有古香之氣，爰題數語，
 以為好事者所珍重耳。
 嘉慶甲子秋九月中澣日
 汀州伊秉綬觀并記

《伊秉綬跋文》

此漢之孔宙碑，舊藏於京陵王氏後，
 終日結為金石契，細察其文，見其墨
 汀州伊秉綬觀并記「伊氏秉綬」(印)「默庵」(印)

「落ち穂拾い記」⑤

『孔宙碑・旧拓本』伊秉綬金泥跋



図版② 「宋拓多宝塔碑」伊秉綬題記



図版④ 二十年前旧板橋



図版③ 東閣梅華



図版⑤ 立群



図版⑥ 錢泳之印



図版⑦ 広陵太守



図版⑧ 山陰童氏家藏

伊秉綬(1764~1815)は粗似、墨卿と号した。晩くには默庵ともは、清朝後期の書法家である。高島槐安居旧蔵『宋拓多宝塔碑』の巻頭に書かれた「宋拓僅存」の題記(図②)は、重厚な隸書で大変魅力的であり、忘れがたい作である。しかし家蔵本の鑑蔵印や跋は、その当時、見れば見るほど気になり、いつ頃か、目障りな印数顆を削り落とした。黒い拓紙の上に捺された印影は、削りにくく耐水ペーパーでなんとか見えないように朱を落とした。伊秉綬の金泥跋も同じように試みたが、朱と異なり上手くできず、削り落とすのを諦めた。十年ほどして、昭和62年(1987年)頃、神保町で文房四宝を扱っていたS氏が、珍しい中国の方を連れて来宅された。上海の空雲軒からアメリカのクリスティ・オークションの中国書画部門に転職された馬成名氏と氏の後輩の張榮徳氏であった。馬成名氏は、『増補校碑隨筆』で有名な王壯弘氏の後輩であり、碑法帖・書画の専門家であり、研究者としても著名な方である。家蔵の金石拓本をあれこれお見せしながら、意見交換した。そのときに、この「孔宙碑」の旧拓本は、拓調は大変いいのですが、鑑蔵印やこの伊秉綬の金泥の跋がどうも気になりと私見を述べてから、お見せした。馬、張の両氏とも、この伊秉綬の金泥の跋も鑑蔵印の伊秉綬の「東閣梅華」(図③)、鄭板橋の「二十年前旧板橋」(図④)の朱文印や

錢梅溪の「錢泳之印」「立群」(図⑤)印も問題ないのではと。この「孔宙碑」は、清朝の名家・伊秉綬や鄭板橋等の通蔵を経た善本であると。この言は予想もなかった。しばらくして、巻頭の「山陰童氏家蔵」(図⑥)印の左側の削り落とした印影が、伊秉綬の自用印の「広陵太守」(図⑦)の白文印であったことに気がついた。僅かであるが、黒い拓紙の上に薄っすらと窺い見ることができ、取り返しのつかないことであった。それ以後、跋文や鑑蔵印も丁寧に見るようになり、その内容は、「この漢の孔宙碑は、古くは京陵王氏から山陰の童氏に帰し、たまたま友人の錢泳(1764~1844)は立群、梅溪と号す」が訪れ、この帖を示し終日金石の交わりを楽しんだ。碑文の拓調の瑞々しく、古香の気があるので、簡単にその珍重されんことを記した」と。清朝の前期の書法家・鄭板橋を始めとして錢梅溪、伊秉綬の手を経てきた流伝もあれこれ想像される。最近、この帖を以前に買い求めた日書店の昭和四十六年の古書目録を入手した。最後方に中国拓本追加として三十余件の碑銘が列記され、三十番にこの孔宙碑が示され、二万五千円と記してあった。

伊藤滋(書齋名・木鷄室)

書道芸術院 令和の群像 (2020)



第35回毎日現代書関西代表作家展 「睡蓮の句」 山崎 掃雪書



山崎 掃雪

恩師の言葉を胸に く着実で冷静に進むことく

令和元年は、関西書道協会にとっても、私にとっても激動の年になりました。恩師とも母とも思っていた砂本杏花会長が、闘病のかいもなく、7月18日に天国に召されたのです。そしてその後、公益財団法人書道芸術院理事長辻元大雲先生より、後任会長に任命していただきました。これからの関西書道協会をどのように進めて行けばよいのかと、心の焦りを感じつつ、一方では、「砂本杏花先生を偲ぶ会」(令和元年11月4日開催)の準備に心落ち着かない日々を過ごしております。

その最中に、第35回毎日現代書関西代表作家

展出品の作品、林徹氏の句「睡蓮の黄色ばかりや雪舟庭」を制作していました。私は「蓮」や「睡蓮」がとても好きで、それらの文字をよく作品に書いています。今回の作品も「睡蓮」が目にとまり、これを、濃墨か濃墨かどちらにしようかと迷いましたが、濃墨と決め、その持つ力強さと渴筆や破筆のデリケートな線を表現したいと、筆を運びました。どうしようもない焦燥感と、先生にご指導いただけないもどかしさとむなしさを感じつつ、無我夢中で書いていました。先生からは常日頃、「渴筆は柔らかいのが本領ですが、弱すぎるくらいがあつてはいけません」と言われていました。このことは一朝

一夕に出せるものでもなく、書作する度に自分に言い聞かせています。

令和2年1月9日〜14日まで、近鉄アート館で開催された「第35回毎日現代書関西代表作家展」で展示されている作品を見た時は身体に震えが起きました。先生の「薔薇」と私の「睡蓮」の作品が並んでいたのです。先生が見守ってくれているようで、言いようのない感情を覚えたのを思い出します。これは、展示担当の方が、先生の横にと、格別のご配慮をいただいたのだと感謝しております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

今後は、関西書道協会会長として、会の運営に当たる所存です。その際には何より会員とのつながりを大切にしたいと思っています。その一例として「関西書道協会だより」を新たに発行しました。その中では、会員の展覧会活動や各展覧会の出品作品、受賞者の一覧などを記載しています。これから、令和元年1月号の『書心』編集後記で恩師が記された「着実で冷静に進むこと」を座右の銘として、書道芸術院理事長辻元大雲先生、白扇書道会理事長種谷萬城先生はじめ諸先生方の温かいお気持ちに感謝しつつ、精進していかなければと強く思っている次第です。

書のひろば

理事長 辻元大雲

新型コロナウイルスの蔓延の影響が拡散 毎日書道展も順延に

皆様ご承知の通り、新型コロナウイルスの蔓延が止まらない。東京をはじめとする主要都道府県では益々感染者が増加し、誠に残念ながら亡くなられる方も日に日に増加している。最初7府県に発せられた非常事態宣言も全都道府県に拡大され、毎日のニュースに心痛められる。

まずはご自身、ご家族での感染防止対策に心し、焦らず落ち着いて対応して頂きたい。

院事務局では勤務体制を縮小し、勤務時間の調整なども行いながら感染防止、安全対策を講じている。但し毎月の「書道芸術」「書道芸術学生版」の作品整理、審査、編集業務などは休むことが出来ず、緊張感をもって対応していることをご理解いただきたい。特に春の昇級試験審査が重なり、作業が倍加している状態で、作品整理・審査・編集などに当たっていただく方々には、リスクを承知で担当していただいている。誠に申し訳なく感謝したい。会員諸氏にとっても普段の稽古など

の活動が出来ずお困りの方々がほとんどではなからうかと拝察する。普段使用していた会場が使えない状態が続いている中、生徒さんへの対応を色々苦勞されていると伺っている。通信指導や手本の配布など様々であるが、何とか工夫して生徒のために出来ることを模索し頑張っていたきたい。

院関係事業の見直し・変更

・5月9日予定定例理事会

書面による審議に切り替える。

・監査 5月7日に変更。

書面理事会へ報告

・6月6日評議員会 予定通り

・6月20日理事会、74回展運営委員会、実行委員会 予定通り

(但し情勢により日程変更、書面審議に切り替える場合あり。)

・8月22〜23日 単位認定岡山講習会は現在の状況、ホテル側との協議により開催は不可能と判断し、来年に順延する。来年同時期に同じ会場で開催する予定。既にご案内を発送済みだがご了承いただきたい。

・秋季展は予定通り開催する。但し情勢により変更もありうることを了承願いたい。

・「書道芸術学生版」春季昇級試験

5月7日締切を1カ月延期して6月7日締切とする。審査なども繰り下げ実施する。既に出品された分も含めまとめて審査する。ご了承を。追

加の受験も可能。事務局へご連絡を。

第72回毎日書道展順延へ

この度の新型コロナウイルス蔓延の影響から第72回毎日書道展が来年開催に順延された。毎日書道会からの順延に関する挨拶全文。

一般財団法人毎日書道会 理事長

朝比奈豊

第72回毎日書道展を1年順延いたします

拝啓 平素から毎日書道展にご協力いただき、厚くお礼申し上げます。さて、新型コロナウイルス問題の深刻化を受け、毎日書道会は4月10日に臨時理事会を開き、「今年の毎日書道展を取りやめ、第72回展の開催を令和3年に順延する」と決定いたしました。5月11日(月)から毎日ホールで行う予定だった作品搬入は中止します。誠に残念ではありますが、状況が日々悪化する中、書家の皆様や関係者の生命と健康を守るための判断であり、何卒ご理解を賜りたく存じます。すでに一般公募とU23の出品料を払い込んだ方には、多少日数がかかりますが、順次返金いたします。

本来なら出品者全員に書面で通知すべきところではありますが、印刷と封入

作業にかなりの時間がかかるため、取り急ぎ社中代表の先生方にご連絡を差し上げる次第です。「順延」のお知らせは毎日新聞の社告および毎日書道会のホームページにも掲載いたしますが、社中内への周知をお願い申し上げます。最後になりましたが、先生方におかれましてはくれぐれもご愛顧くださいますよう、また、今後のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

敬具

全日本書道連盟関係

・5月7日 定例理事会は書面理事会として審議する。

・6月4日 総会は規模を縮小して開催する。会員へは総会通知するが非常事態宣言によりご出席をなるべく回避していただく。このため委任状提出にて議案(令和元年度事業報告・決算の承認、令和3年度の事業計画など報告ほか)をご承認いただく。

・総会時、開催予定の講演会・懇親会は中止する。

・夏期書道大学 8月7日〜9日 池袋サンシャインシティ会場 現下の状況により本年は開催を中止する。

第55回記念高野山競書大会順延

第55回記念展であるが状況により開催を来年に順延する。

第55回記念展であるが状況により開催を来年に順延する。

第55回記念展であるが状況により開催を来年に順延する。

第73回書道芸術院展〈続〉

(併催 第71回全国学生書道展)

実行委員長

下谷 洋子

第73回書道芸術院展(併催第71回全国学生書道展)については、平成31年3月9日開催の理事会に於いて、その大綱が次のように決定された。

○第73回書道芸術院展

1 会期 令和2年2月5日(水)

～2月11日(祝)

2 会場 東京都美術館(上野公園内)

3 募集規定

ア 無鑑査、一般公募の部

・ 作品・書類搬入

令和元年12月2日

・ 鑑別・審査

令和元年12月14・15日

イ 審査会員、審査会員候補の部

・ 書類搬入 令和2年1月17日

・ 作品搬入 令和2年1月27日

ウ 審査

・ 審査会員候補

令和2年1月28日

・ 審査会員 令和2年1月29日

4 作品解説会他(都美術館)

5 学生展表彰式(帝国ホテル)

令和2年2月9日

6 一般表彰式(帝国ホテル)

令和2年2月9日

7 祝賀懇親会(帝国ホテル)

令和2年2月9日

8 出品作品サイズ(単位cm)

(1)財団理事・監事

A 91×242 B 152×152

C 121×182

(2)名誉会員・参与会員

財団評議員・参事・審査会員

D 61×242 E 79×182

F 85×176 G 106×136

H 121×121

(3)審査会員候補

I 61×182 J 73×152

K 91×121 L 105×105

(4)無鑑査

M 46×167 N 86×86

(5)一般公募

書作品 O 35×136 P 25×167

Q 65×86 R 30×39

篆刻作品

刻字作品

S 51×61 T 30×91

U 35×67.5

9 一般公募出品料

(1)30歳以上 700円

(2)30歳未満および70歳以上3000円

(令和2年1月1日現在)

10 運営委員会

○運営委員長 辻元大雲

○運営委員 石井明子

稲垣小燕

金井如水

小竹石雲

小浜大明

坂本素雪

種谷萬城

津田海仙

浜田堂光

半田藤扇

11 実行委員長

実行副委員長 下谷洋子

12 事務局次長 山口仙草

事務局次長 片岡豪峰

13 部長

総務部長 小島孝子

審査部長 千葉蒼玄

陳列部長 知野洛水

祝賀会部長 半田藤扇

会計担当 近藤尚子

○第71回全国学生書道展

1 出品規定

ア 出品資格

第1部 幼稚園、小学生

第2部 中学生

第3部 高校生

第4部 大学生、

専門学校生

イ 部門 ①半紙の部 ②半切1/2の

部、両部門に出品できる。

ウ 作品締め切り・搬入

令和元年10月28日

エ 審査

令和元年11月6日～10日

才褒賞 A 個人賞 B 団体賞

2 運営委員会

運営委員長 辻元大雲

以下実行委員長、実行副委員長、

陳列部長、会計担当、事務局次長、

事務局次長は院展、学生展共通。

総務部長 菊池富美子

審査部長 名越蒼竹

表彰部長 三森慧香

揮毫部長 大平邑峰

3 審査役員

A賞審査員(6名)、

A賞選考委員(9名)、

中央審査員(19名)

4 指導者作品展示(131点)

ア 出品資格

・ 本展出品指導者

・「書道芸術学生版」指導者

・書道芸術院審査委員会

イ 作品寸法

・半紙額内自由

○運営委員会

第73回書道芸術院展 運営委員会を

令和元年6月22日、東神田事務所に於いて開催。

*審査委員の作品について

〈褒賞〉

書道芸術院春華賞(1名)

○選考は運営委員(財団理事・監事)が担当。(名誉会員、参与会員、選考委員、参事で過去の理事・監事経験者、過年度受賞者は対象外)

春華賞候補作品には赤シールを添付し公表する。

*審査委員候補の作品について

〈褒賞〉

書道芸術院大賞(1名)

書道芸術院準大賞

(各部を通して 5名)

白雪紅梅賞

(各部を通して 若干名)の他、

同候補となった作品については昨年と同様「書道芸術院俊英賞」とする。

○選考委員は運営委員(財団理事・監事)が担当。

*無鑑査作品について

〈褒賞〉

院賞、毎日新聞社賞、特選、秀作とする。

○審査員

漢字部主任 ・飯田春香はじめ12名

かな部主任 ・奥田瑞舟はじめ3名

現代詩文書部主任

・横田汀華はじめ10名

篆刻・刻字部主任

・小林古径はじめ2名

前衛書部主任・太田連紅はじめ6名

○審査事務委員

漢字部主任 ・青柳明華はじめ12名

かな部主任 ・仙場美枝子はじめ2名

現代詩文書部主任

・江本興舟はじめ11名

篆刻・刻字部主任

・栢野青溪はじめ2名

前衛書部主任・相内珠莉はじめ6名

*一般公募作品について

〈褒賞〉

入選作品のなかから審査して、準特選、佳作、褒状を与える。

○審査員

漢字部主任 ・三浦鄭街はじめ12名

かな部主任 ・須田清子はじめ3名

現代詩文書部主任

・大平邑峰はじめ11名

篆刻・刻字部主任

・大沼樵峰はじめ2名

前衛書部主任・北村白琉はじめ6名

○審査事務委員

漢字部主任 ・菊池昌春はじめ12名

かな部主任 ・塩澤美紅はじめ2名

現代詩文書部主任

・伊藤翠心はじめ11名

篆刻・刻字部主任

・赤羽蘭径はじめ2名

前衛書部主任・野口加奈はじめ6名

○実行委員会

第73回書道芸術院展 実行委員会を

令和元年6月22日 東神田事務所に於いて開催。

辻元大雲運営委員長はじめ実行委員長、実行副委員長2名、院展関係の各部長、全国学生書道展関係の各部長、事務局長・次長、会計担当等出席していただいた。

第73回院展、併催の第71回学生展について部員と日程等確認した。

○第73回書道芸術院展 作品搬入

・一般公募出品数

578点 昨年比30点減

・無鑑査出品数

777点 昨年比49点減

・審査委員候補出品数

716点 昨年比5点増

・審査会員出品数

513点 昨年比14点減

○鑑別・審査

一般公募と無鑑査作品の鑑別・審査が、令和元年12月14日、15日の両日、共和会館に於いて行われた。

無鑑査に対する賞

院賞14点(漢5、かな1、現詩5、

篆刻・刻字1、前衛2)

毎日新聞社賞4点

特選93点

秀作200点を決定

入賞率40%

○一般公募に対する賞

準特選39点(漢13、かな6、現詩11、

篆刻・刻字1、前衛8)

佳作116点

褒状195点

入選229点を決定

入賞率60%

○審査委員候補に対する特別賞選考

令和2年1月28日 東京都美術館

地下審査室で20名の選考委員によって行われた。

各部より10%の枠で賞候補を選考。更に1/2に絞り、全体の選考対象とする。

選考委員の記名投票によって各部ごとの序列を決めた上で、漢字から前衛書部までの5部門のトップ作品を並べての最終投票。書道芸術院大賞に、漢字部・木村澄春(奈良県)

さんが輝いた。更に

書道芸術院準大賞5点

(漢1、かな1、現詩2、前衛1)

白雪紅梅賞10点

(漢3、現詩3、篆刻・刻字1、前衛3)

書道芸術院俊英賞56点を決定。

○審査員に対する書道芸術院春華賞選考

令和2年1月29日東京都美術館地下

審査室で20名の選考委員によって行

われた。

前日20%の賞候補を出し、当日1/2に絞って記名投票の結果漢字部・佐藤菜扇（千葉県）さんが、書道芸術院春華賞に輝いた。

○第71回全国学生書道展

第71回全国学生書道展には北海道から九州まで全国から作品が寄せられ、令和元年10月28日締め切った。出品点数は、半紙の部が100点。半切1/2の部286点。

審査は令和元年11月6日～10日にかけて、名越蒼竹審査部長のもとA賞審査員6名、A賞選考委員9名、中央審査員19名によって行われた。優秀作品が多く、一作一作に時間をかけて審査。

その結果、全国学生書道展大賞に半紙の部5点、半切1/2の部3点、準大賞に半紙の部10点、半切1/2の部5点が選ばれた。なお、上位入賞者の作品と個人賞の氏名団体賞については、第71回全国学生書道展成績表冊子に掲載された。都美術館では見応えのある作品が地区別に展示され見事であった。

また、優れた作品を沢山出品して下さった団体の中で、大阪府の「春洋会」が全国優勝に輝いた。

○陳列部

2月4日、知野洛水・陳列部長のもと、院展、学生展、指導者作品展を含む計500点という膨大な数の作品展示が順調に進み、予定通り記者会

見を行うことができた。伊藤懐舟、見越雪枝副部長、陳列部員、お手伝い下さった方々、川端商会の皆様にご感謝。

○記者会見

毎日新聞社ほか報道関係、評論家の方々にお集まりいただき、辻元大雲運営委員長より資料に基づき、第73回展の概要を説明し記者会見を行った。

○評論家の眼

毎日新聞社芸部記者・桐山正寿様、台東区立書道美術館主任学芸員・鍋島稲子様のお二人に依頼、作品評価をいただいた。直筆での寸評は作品脇に掲示し、更に印刷して参観者にも配布した。

「桐山正寿の眼」

大隅晃弘、白石和楓、三森慧香、勝山初美、東福青堂の各氏。

「鍋島稲子の眼」

京 絹子、井上始源、加藤腸流、加藤紫翠の各氏。

○作品解説会・ワークショップ

・無鑑査・一般公募上位入賞作品対象
(令和2年2月5日)

・「書道芸術院の書・かな、篆刻・刻字、前衛」展、出品17名の作品を中心として
(令和2年2月8日)

・第1・7室特別賞・院賞・毎日新聞社賞等を中心として
(令和2年2月10日)

・第1室院役員、大作、春華賞等を

中心として

(令和2年2月11日)

・ワークショップ(新企画)

(令和2年2月8日・11日)

学生展会場に於いて、院企画委員が担当し、2020年のカレンダーに参加者が揮毫した小品を貼り込むという内容で好評であった。

○全国学生書道展表彰式

令和2年2月9日表彰式に先立って午前10時より、学生展会場に於いて学生展大賞受賞者、院役員代表による席上揮毫を行った。大賞受賞者にふさわしい立派な揮毫会となった。

その後13時より帝国ホテル富士の間に於いて、毎日新聞社事業本部総務・企画部長・三岡昭博様をお迎えして表彰式を挙行了した。

表彰状の授与は、辻元大雲運営委員長はじめ財団理事・監事が務めた。毎日小学生新聞賞、毎日新聞社賞については三岡昭博様にお願ひした。

帝国ホテルでの六回目の表彰式。片岡豪峰事務局次長の手配もよく、良い表彰式を挙行。菊池富美子総務部長、三森慧香表彰部長、大平昌峰揮毫部長の各氏に感謝。

○書道芸術院展表彰式

学生展表彰式に続いて同会場にて、書道芸術院展の表彰式が挙行された。ご来賓は毎日書道会専務理事・西村修一様をお迎えした。

春華賞、大賞、準大賞は、辻元大雲

運営委員長より授与。以下の各賞については、財団の理事、監事によって授与。西村修一様には毎日新聞社賞の授与とともに激励のご祝辞をいただいた。

最後に受賞者を代表して、書道芸術院大賞に輝いた漢字部・木村澄春さんからの謝辞があった。

○祝賀懇親会

院展表彰式終了後、17時30分から祝賀懇親会の開宴となる。

開会のことは小竹石雲常務理事。続いて辻元大雲理事長により主催者のあいさつ。ご来賓のご祝辞は毎日新聞社事業本部長・山科武司様、全日本書道連盟理事長・星弘道様、中華人民共和国駐日本国大使館公使参事官・石永菁様よりいただいた。

乾杯は毎日書道会専務理事・西村修一様の御発声で開宴となる。

春華賞受賞者・佐藤菜扇さんをはじめ、たくさんのお受賞者の喜びの声や紹介が続き、ご来賓の方々との交流も賑やかな宴となる。

最後に後藤大峰常務理事の閉会のことばで終了した。

○表彰式・祝賀会部

半田藤扇部長を中心に小島孝予総務部長他、委員の方々、事務局と総力をあげての手際の良さで盛況のうちに無事終了した。

○総務部

学生展、院展とも総務部は、書類搬入から作品搬入、整理、審査準備、表

特集：第73回書道芸術院展

彰式、祝賀懇親会、撤回、搬出など、長期に亘りご苦勞願った。

○審査部

学生展は名越蒼竹審査部長、一般は千葉蒼玄審査部長のもと、事務局、総務部との連携もよく、審査、事務処理ともに順調に進めていただいた。佐藤菜扇副部長はじめ委員の方々に感謝。

○会計部

会計部は学生展と第73回展の全てに亘り、膨大な予算を緻密な計算によって滞りなく処理していただき、事業終了後の残務も含め、近藤尚子担当に心から感謝。

○運営事務局

院展、学生展、運営の全てに関わり、膨大な事務局作業をコンピューターを駆使。事務処理担当の棚リンクスとの連携を密にして進めていただいた。

各部の当番審査員並びに事務委員の人数割出に始まり、出品個票の出力、搬入統計の集計、賞の配分、審査結果の通知、陳列計画、出品者目録の作成、作品配置、祝賀会座席配置等々、総務、審査、陳列、祝賀会、会計とあらゆる部署と連携し事務処理に関わっていた。

又、国際交流ウィーン書道展及びスロバキアでの交流の報告を急遽展示したことも、事務局のご協力に深謝。

山口仙草事務局長、片岡豪峰事務局次長のご苦勞に対し、深く感謝申し上げます。



第73回展授賞式



作品解説会



学生展席上揮毫風景



作品解説会（全体）



学生展ワークショップ



学生展授賞式

古典鑑賞

420

雁塔聖教序

唐(653年)

②

褚遂良



〔解説〕雁塔聖教序の特徴は、藏鋒(逆筆ぎみに起筆して穂先を穂の中に包み込むように送筆する筆遣い)を多用し、細線の中にも粘りと強靱さを内在した点画を基調とした書法にある。筆先を十分に利かせ、弾力豊かな抑揚のある運筆が緩急・太細・強弱の変化を生んでいる。そのリズムカルな線質はこれがあたかも行草書であるかのような抒情的な雰囲気さえ感じさせて、

初唐の楷書において独特の境地を示している。この雁塔聖教序は、「三蔵聖教序碑」と「大唐三蔵聖教序記」の二碑からなり、今なお西安市慈恩寺の大雁塔の入り口の左右に現存する。右に位置する聖教序は、右上端から始まる一般的な縦書きであるのに対し、左の序記は左上端から右下端に書き進められ、二碑は左右対称を見させている。(編集部)

(掲載図版80%に縮小)

騰漢庭而皎夢。照東／域而流慈。昔者分形／分蹟之時。言未馳而／成化。當常現常之世。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

漢字研究部臨書課題 (半紙普通判・縦使用) 上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 (A. 大作の部—毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可) 当該古典の上記掲載部分以外も可。
B. 小作の部—半切¹/₂以上半切以内 (A・B縦横自由)

古筆鑑賞

194

高野切第一種
(伝紀貫之)

②

〈よみ〉寛平のおほときのきまののみやの
うたあはせのうた

よみびと

むめのかをそでにうつしてとらめては
はるはずぐともかたみならまし

そせい

ちるとみてあるべきものをむめのはな
うたてにはひのそでにとまれる

寛平のおほときのきまののみやの

うたあはせのうた

よみびと

むめのかをそでにうつしてとらめては

はるはずぐともかたみならまし

そせい

ちるとみてあるべきものをむめのはな

うたてにはひのそでにとまれる

(出光美術館蔵)

*掲載図版は70%縮小。

かな研究部臨書課題
特別研究部臨書課題

〔半紙普通判(料紙可)・縦長に使用〕
別紙を裁断して貼付も可。半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)
A. 大作の部 毎日展審査員・会員サイズ以内(2×6尺・全紙も可)
B. 小作の部 半切以上・半切以内(縦横自由)
△いづれも左記の掲載以外も可。V

〔解説〕高野切はいずれも、白麻紙に雲母砂子が一面に散りばめられた清楚で、奥ゆかしい料紙に書かれている。

高野切第一種はこの美麗な料紙の上にゆったりとした筆運びで書写され、気品に富む優麗典雅な情緒を醸し出している。

線は緩急抑揚の変化に富み、温雅にして筆力があり、字形は端正で優美。そして連綿の巧妙さ、墨継ぎの自然の美しさが際立っている。平安時代の古筆の中でもっとも格調の高い美しさを示す優品として尊重されている。

高野切第一種と同筆の古筆遺品に、伝藤原行成筆「大字和漢朗詠集」・伝宗尊親王筆「深窓秘抄」などがある。(編集部)

※古筆は原寸(以上も可)で臨書して下さい。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【六月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

半田藤扇選書



窮
微
測
妙

よみ (微を窮め妙を測る)

書体 自由

習い方解説 (一)

半田藤扇

窮微測妙 (孫過庭「書譜」)

(微を窮め妙を測る)

精緻な理法を窮め、靈妙な真理をもとめる。深遠な妙趣を追求する。

唐代の三大家の一人である褚遂良。独自の書風を確立した「雁塔聖教序・枯樹賦」の名品をベースに創作。

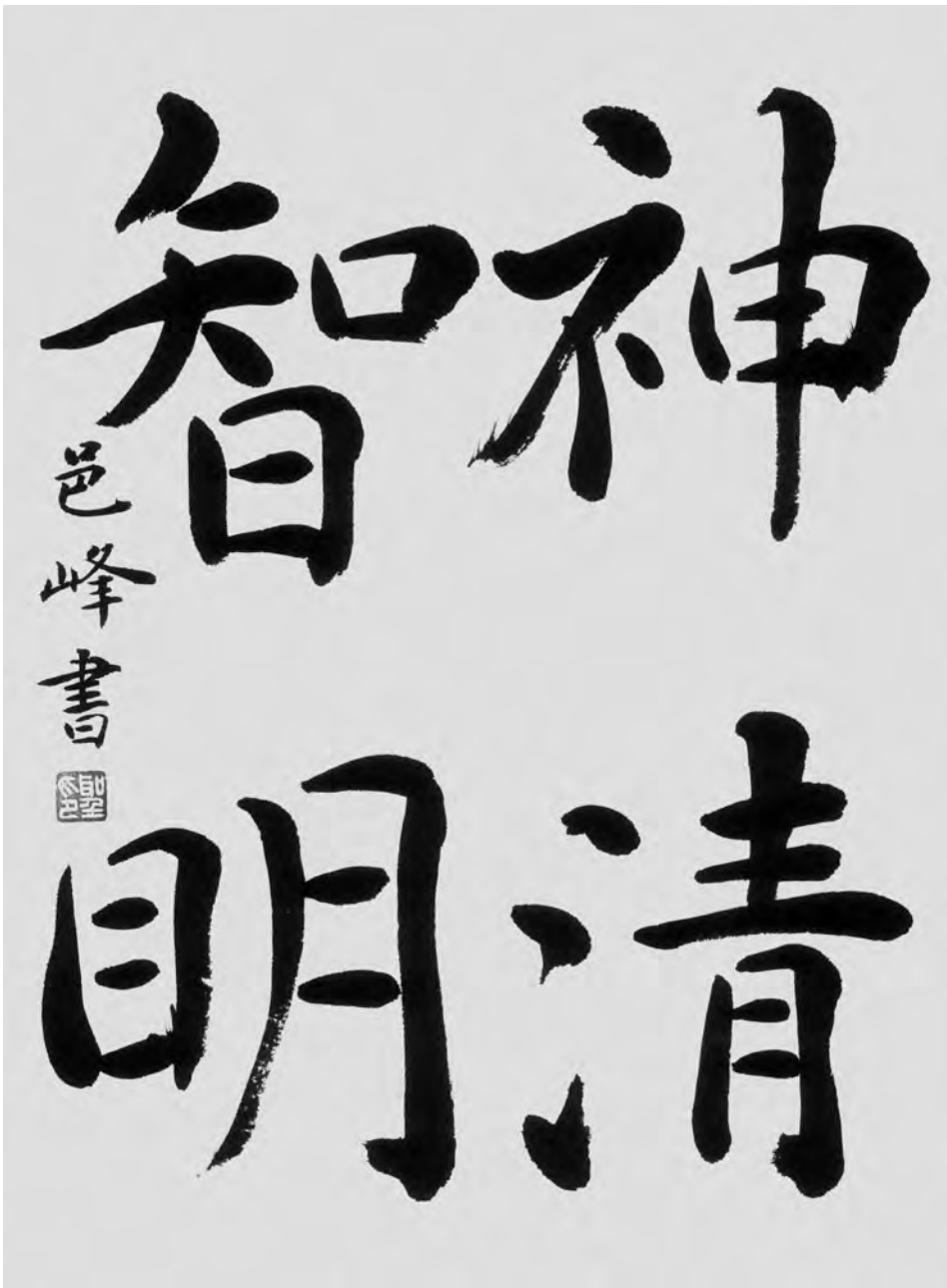
上記の作は、「枯樹賦」の叙情的な表現で筆意が高雅で心のおもむくままの書きぶりに挑戦してみました。羊毛筆・長鋒を使用。

※左記の参考作品▽上記と同じ羊毛筆で、楷書「雁塔聖教序」の倣書。少し硬めの筆での挑戦もよいと思います。



漢字規定 秀級以下 【六月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

太平邑峰選書



神清智明

よみ (神清く智明か)

書体Ⅱ楷書

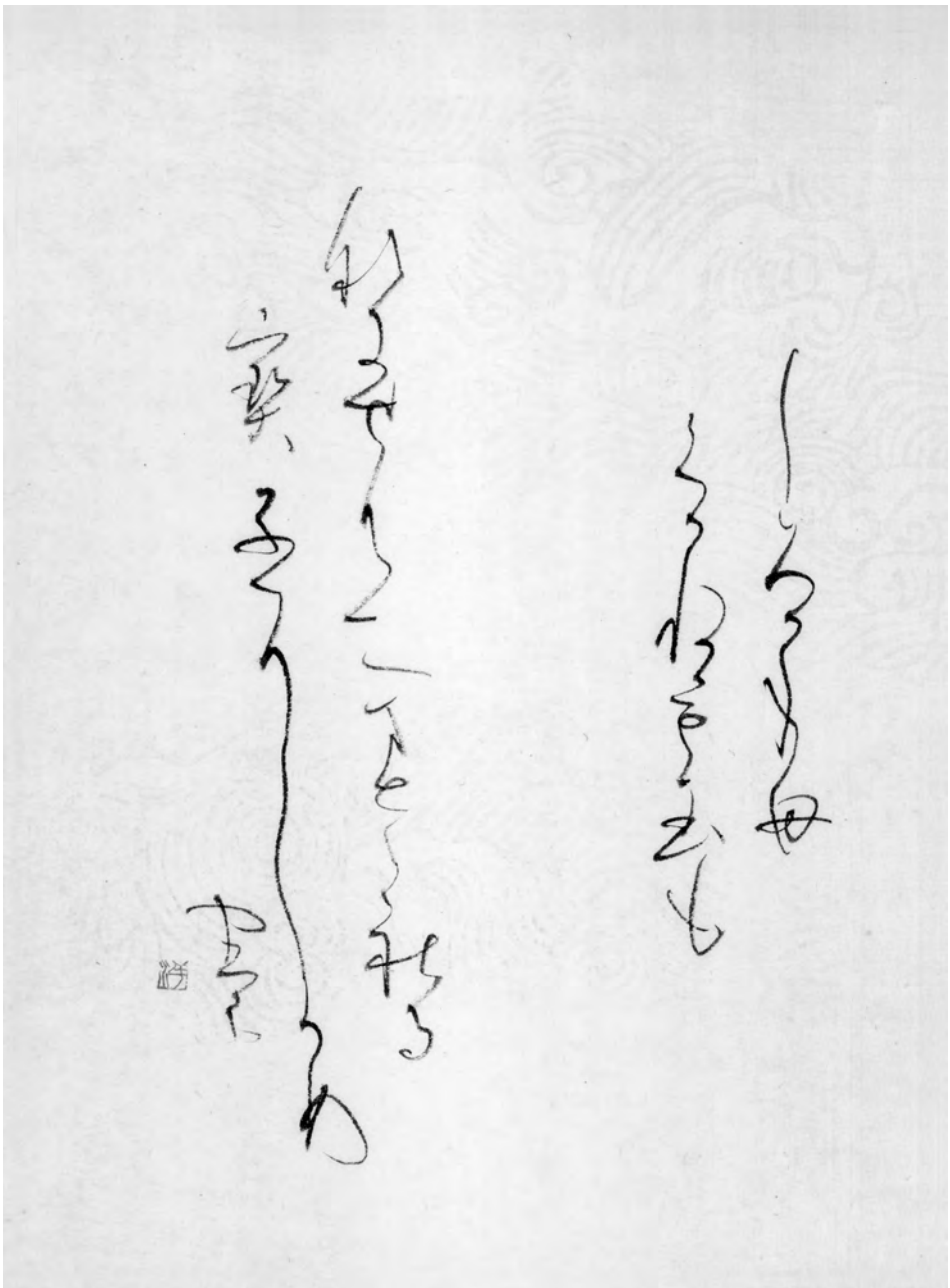
習い方解説 (二)

太平邑峰

神清智明
(神清く智明か)

2回目は、王羲之の細楷を参考にしてみました。王羲之も鐘繇の書体を学んでいたといわれていますが、実際に「黄庭経」や「楽毅論」を臨書してみるとその血が流れている事が実感できると思います。同じ羲之の書でも伝わる法帖によって若干印象が異なりますが、格調の高さ、行意のある柔らかなく琴線に響くような味わいのある線は共通する特徴ではないかと思えます。

今回の参考手本は、最終的には前回と同じ中峰の羊毫を使用しましたが、やや固めの筆や長鋒の筆など色々試してみました。あまり使っていなかった筆なども引っ張り出したたりして楽しい時間となりました。



習い方解説 (二)

下谷洋子

銀も金も玉も何せむに
優れる宝子にしかめやも

(山上憶良「万葉集」)

「子らを思ふ歌」と題されたもので長歌の反歌。どんなにすぐれた宝でも子供には及ばないの意。

今回、宝という漢字を旧字体の草書で書きました。この寶という草書は正統な崩し方ではありませんが、粘葉本和漢朗詠集や蓬萊切などにはこのままの形で変体がなとして扱われています。

ここで①現在のかな表現において、新字の漢字は旧体で書くことが多い。

②漢字として読ませる時は、前後の関係でやゝ大き目に書く・点画を省略しすぎない。

他にも代表的なものとして、春をすの変体かなとして扱うことなどは多くの方が経験していると思いますが、ちょっととした工夫で、読みにくさを免れます。

よみ方 銀(しろ可年)も(母)金(久可ね)も(毛)玉も何(那)れせむ(无)に(二)

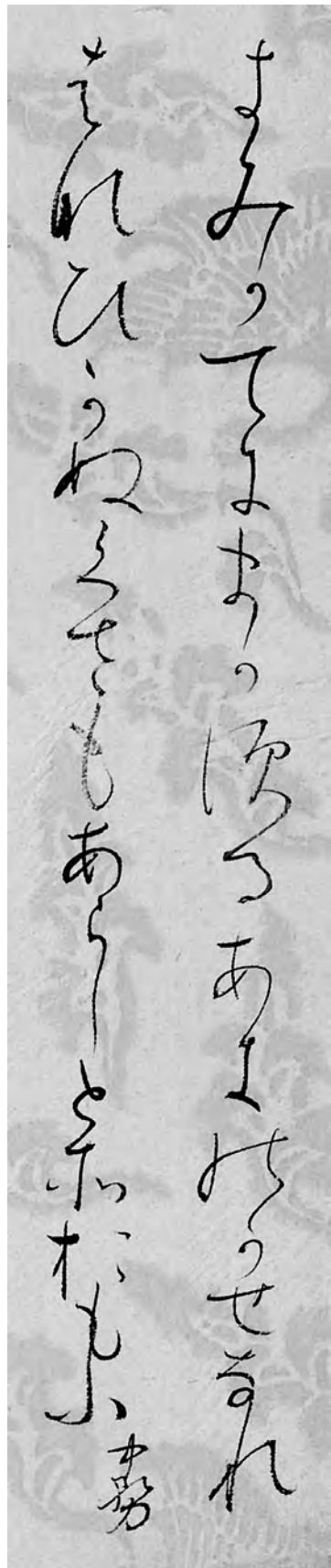
ま(万)され(禮)る宝(寶)子に(耳)しか(可)めやも(裳)

創作

かな規定 秀級以下 【六月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿または単体を含む)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方

き(支)みが(可)てに(尔)まか(可)す(須)るあき(支)の(能)か(可)ぜな(奈)れ
ば(者)な(那)びか(可)ぬくさもあらじとぞ(所)お(於)もふ中務

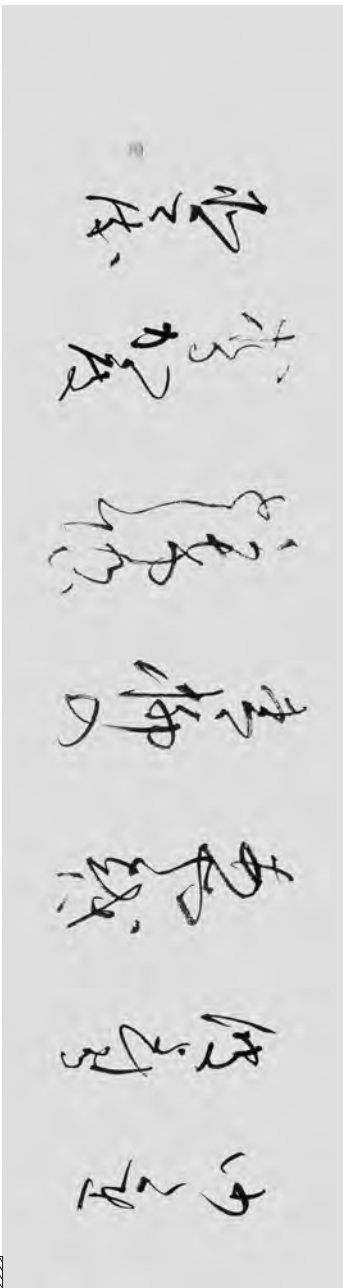
習い方解説 (二)

善養寺紅風

さざれ波^{なみ}よする文^{あや}をば青柳^{あおやなぎ}の
影^{かげ}の絲^{いと}して織^おるか^とぞ見る
(紀貫之)

かな条幅規定 【六月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

善養寺紅風選書



創作

よみ方 さ(沙)ぎ(し)れ(連)波^{なみ}よす(す)る文^{あや}を(越)ば(八)青柳^{あおやなぎ}の
影^{かげ}(可希)の(乃)絲^{いと}として織^お(於)るか^と度^たぞ(所)見^み(三)る(流)

出品券
貼付位置

横作品は、流れを出すのに苦労
します。文字の大小、広狭等、さ
らに連綿の表情を工夫してしなや
かな流れを出します。今回は、複
雑な字をえらばず基本的な組み合
わせて自然に仕上げました。墨継
ぎは「か度」でしたが「として」
あたりでも良いでしょう。

※ヨコ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【六月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

黄鶴樓中吹玉笛 江城五月落梅花
五月落梅花 華
江

黄鶴樓中吹玉笛 江城五月落梅花 (李白) 與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛
(黄鶴樓中玉笛を吹く、江城五月落梅花。)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【六月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小竹石雲選書

春樹萬家烟

石雲
書

春樹萬家烟 (陳鵬年)

(春樹万家の烟)

書体||自由

習い方解説 (二)

種谷萬城

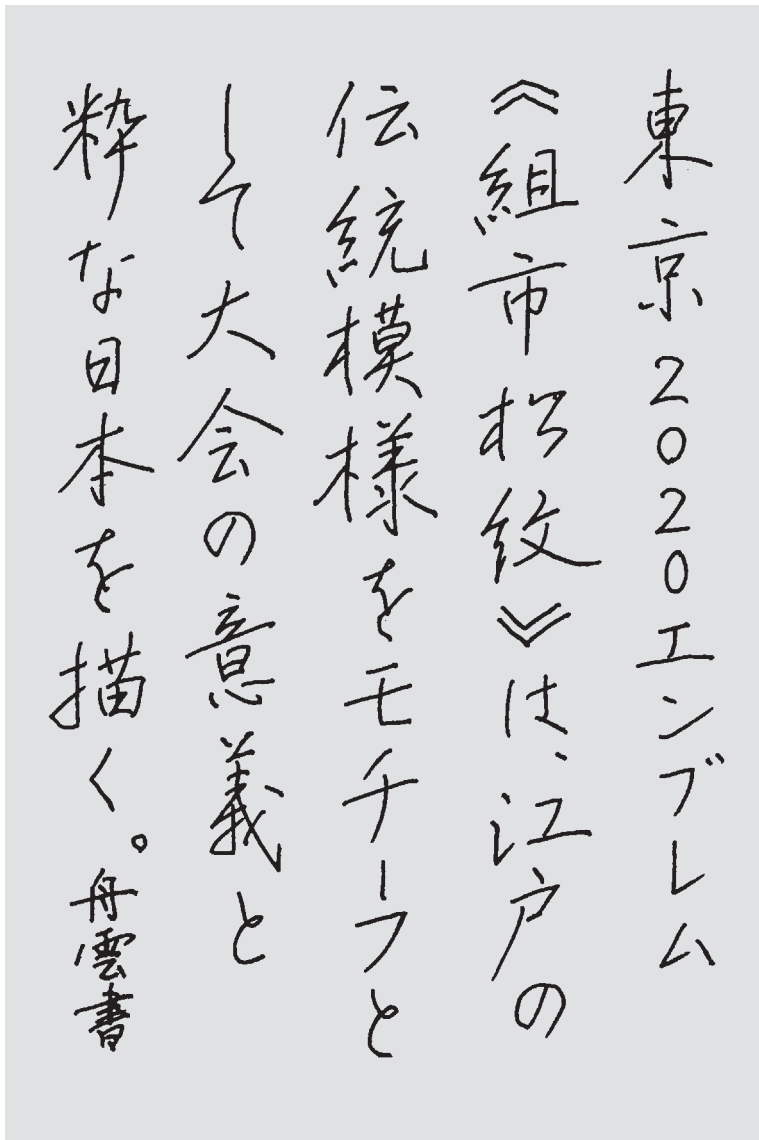
李白詩を隷書で書きました。隷書は篆書の点画を直線化・簡略化した漢代の正式書体です。起筆は藏鋒。収筆に波勢。特に波磔に裝飾的な筆法が見られます。横広の字形、水平・等間隔の横画、転折部は筆を一度引き抜き、改めて藏鋒で入筆します。今月は曹全碑を基にしました。漢簡・漢碑の名品の臨書で多様な隷書が学べます。

※タテ形式に限る

習い方解説 (二)

小竹石雲

前回は真筆に重厚さをねらったものでしたが、今回は動きに重点をおいて書いてみました。筆先が紙面にあたった瞬間の力が緩むことなく、筆鋒の撓りで書けると清澄な線になります。運腕を大きく伸びやかに最後まで書ききることが大切です。そして同速同圧にならない、リズム感のある動きを学びましょう。



用紙Ⅱはがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (二)

広瀬舟雲

「東京^{ニゼロニゼロ}2020」は、東京オリンピック・パラリンピックの略称。延期となってもこれを受け継ぐ事となった。エンブレムは開催都市の文化等をモチーフとした大会の紋章であり、街角のポスターや旗に描かれ開催への気運を高めている。形の異なる種類の四角形を組み合わせ、国や文化・思想などの違いを示し、それらを超えて繋がりが合うデザイン。安心安全を脅かす未知の敵に打ち勝つ特効薬の開発など今まさに地球規模の協力が必要な時。算用数字と漢字、仮名との調和がポイント!!

東京2020エンブレム
《組市松紋》は、江戸の
伝統模様をモチーフと
して大会の意義と
粋な日本を描く。

(東京2020大会公式サイト)

前略 草々 新緑 若葉薫る
 前略 草々 新緑 若葉薫る
 青葉を渡る風もさわやかな候と
 青葉を渡る風もさわやかな候と

姓

号

(楷書) 前略 草々 新緑 若葉薫る
(楷書) 青葉を渡る風もさわやかな候と

(行書) 前略 草々 新緑 若葉薫る
(行書) 青葉を渡る風もさわやかな候と

基本用語

「前略」前文省略する場合に使用する。結びは「草々」
「早々」など対応する言葉を使用する。

(掲載手本90%に縮小)

※小筆・筆ペン・サインペンなどを使用。署名は各自の姓号を。

- 用紙は普通版半紙 $\frac{1}{2}$ 、B5版コピー用紙でも可。
- 所定の出品券を作品の右下に貼る。〈審査会員を含む誰でも出品可〉

ホープ作品
各部総評

NO. 707

ペン字部 師範 田玉 哲子

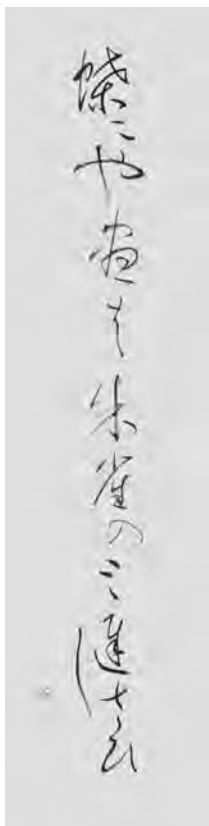
表現力豊かな流麗な筆致が魅力。漢字とかながよく調和し、落款まで統一され心地よい。

◎ペン字部総評 字形よく見応えのする作品が多かったが、書体は自由なので手本中心でなく、多彩な表現を望みます。(仙草評)

錦めくろくろを後鳥羽院と
順徳院の親子にしたりは
政治的に不幸な幕切れたた
文を最後に飾ってあげた
かったらいい。 花子書

かな条幅部 準師 岡田 麻美

たおやかなリズムで潤滑も美しく、自分なりの解釈で運筆した姿勢が好ましい。もう少々大きくノ
◎かな条幅部総評 比較的バランスよく誤字も少なかったが、何でも過剰品を欠く。字数が少ないので墨量も調節したい。(洋子評)



現代詩文書部 特選 田中 一葉

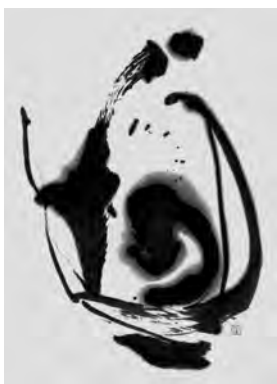
鍛錬による確かな文字表現、大胆な大字と軽妙な小字の調和も見事である。

◎現代詩文書部総評 日頃の学習で学んだ書として大切な事を書作に生かして欲しい。(巨峰評)



漢字条幅部 師範 東 花子

軽妙な筆致で上質な線が美しい。余白も充分に取り、明るく爽やかな構成。完成度の高い作品です。

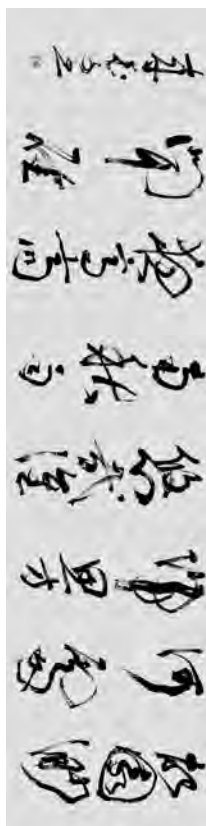


前衛書部 特選 波多 祥舟

線の造形に魅力ある作品。躍動感あふれる筆線見事、更なる高みを目指して。

◎前衛書部総評 個性的で、表現力豊かな意欲作品に期待する。(仙岳評)

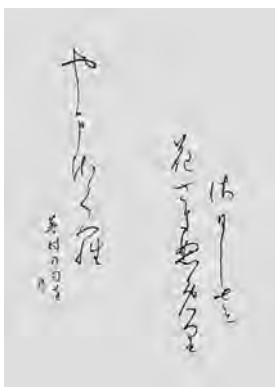
◎漢字条幅部総評 横形式の作品にも慣れてきた感があります。配置の工夫が巧みになってきました。齋・齋の誤り多見。(萬城評)



かな部 師範 磯貝 清輝

安心して眺められる作品である。連綿線のスピード感が古典の学習の深さを感じさせ美しい。

◎かな部総評 過大、過小で字粒の把握困難な作多く残念。わかり易い文字の組み合わせ、墨量変化で美しい疎密を創る努力を。(明子評)



漢字部 師範 新井 藤雪

すっきりと切れ味よく、爽快な作品。全体構成もバランスよくまとまって安定感ある作。

◎漢字部総評 上級4字句は見慣れた語句でやや平凡作多し。書体書風の変化や、用具の違いによる工夫など更に努力を。(大雲評)



「書道芸術」2020年4月号(708)から 競書部門など変更のお知らせ

「書道芸術」4月号(708)から内容が一部変更になりました。詳細についてお知らせします。奮ってご出品をお願い致します。

1. 「篆刻部」を新設

△募集規定▽

① 篆刻
ア. 課題による語句
イ. 原印は自由
(原印のコピー添付)

② 創作 語句は自由

○ 印面の大きさは2.3cm(八分角)以内とし朱文、白文自由。

○ 印箋については市販のもので、半紙横 $\frac{1}{2}$ の大きさに切ったものでも可。

○ 創作、篆刻とも応募は一人一点とする。

○ 審査結果は段級を設けない。優秀作品と選評を掲載する。

2. 「実用書」を新設

△募集規定▽

○ 用紙 半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm)、B5コピー用紙縦(26×18.1cm)も可。

○ 課題 毎月参考語句、手紙文

など指定の語句を書く。

○ 毛筆小筆、筆ペン、サインペンも可。

○ 審査結果は段級を設けない。優秀作品と選評を掲載する。

3. 「特別研究部」の作品サイズの変更

A. 大作の部とB. 小品の部を設ける。

A. 大作の部の作品寸法
(創作・臨書)

毎日展審査会員・会員サイズ以内
(縦横自由)

1. 242 cm (8尺) × 61 cm (2尺)

2. 182 cm (6尺) × 79 cm (2.6尺)

3. 176 cm (5.8尺) × 85 cm (2.8尺)

4. 121 cm (4尺) × 121 cm (4尺)

5. 136 cm (4.5尺) × 106 cm (3.5尺)

6. その他

B. 小品の部の作品寸法
毎日展一般公募サイズ・全紙も可
(創作・臨書)

○ 小画仙半切以内、半切 $\frac{1}{2}$ 以上
(縦横自由)

○ 「特別研究部」大作の部・小品の部(創作・臨書)一人一点出品とする。

※応募資格

1. 篆刻部、2. 実用書、3. 特別研究部は審査会員・審査会員候補・無鑑査・一般講読者などな
たでも出品できます

※出品券

それぞれ所定の出品券(P46)を使用して下さい(作品の右下に貼付する)。

お知らせ

「21世紀の書―私の主張―」は3月号(707)をもちまして終了いたしました。

6月号(710)から新企画として、かな基礎基本講座(下谷洋子先生担当)と現代詩文書基礎基本講座(小竹石雲先生担当)がスタートします。

※不明な点がありましたら、編集部までお問い合わせください。

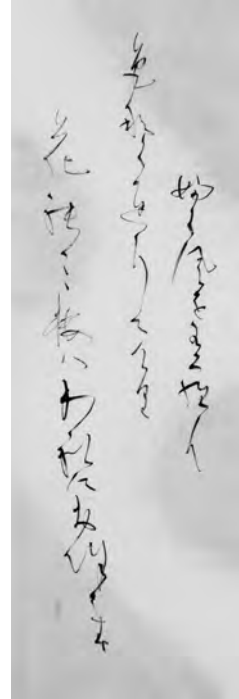
今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 山口仙草 田村鄭雲 三浦鄭街

かな

(潮音) 齋藤杏邑 「吹く風を」



齋藤杏邑書

180×60cm

現代詩文書

(蒼風) 笹木蒼風

「小野十三郎詩」



笹木蒼風書

133×60cm

◆自然な行構成に、締まった切れ味よい線質で軽快なリズムをたたみ、清品な趣。墨量もう少し欲しい。(洋子評)

◆練度の高い丁寧な運筆で線の太細、潤濁も絶妙な作品です。墨量の変化等、更なる発展を望む。(仙草評)

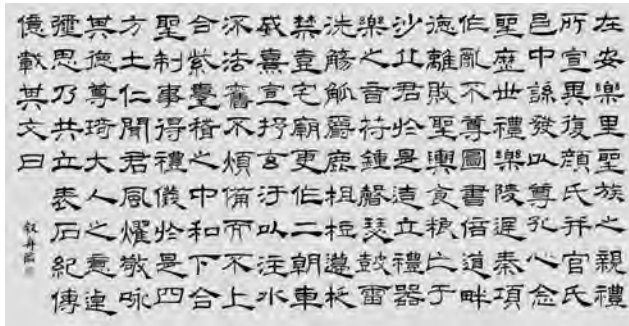
(仙草評)

臨書

(千葉)

竹浪叙舟

「礼器碑」



135×70cm

◆料紙の模様を生かし、変化の中にも洒落た雰囲気を出す。自然な運筆で、深味ある線質が美しい。(鄭雲評)

◆暢びやかな中にも厳しさのある線質。3行目の動きのリズミカルな部分は、特に魅力的である。(鄭街評)

(鄭街評)

◆洗練された横の臨書作品で淀みなく軽快に筆を進めている。品格高く見応えのある作となっている。(仙草評)

(仙草評)

◆存在感十分な礼器碑の臨書作品。作者の古典に望む強い姿勢が感じられる。次の作品も楽しみである。(鄭街評)

(鄭街評)

◆強靱な精神力を感じる臨書。一点一画だけでない、臨む姿勢が群を抜き、たゆまぬ努力に敬意。(洋子評)

(洋子評)

◆熟練した細字表現で構成が良い。線が鋭く強靱、隙もないが、作品からゆとりが感じられると尚良い。(鄭雲評)

(鄭雲評)

◆詩文の意を生かし、言葉が伝わるように表現されている。墨量の配置も良く、小書き部分の調和絶妙。(鄭雲評)

(鄭雲評)

◆粘り強い線質で潤濁のきいた中字と小字を組み合わせた構成。特に小字部分が味のあ

る雰囲気が良い。(鄭街評)

◆大胆な筆致で文字造形の変化を意識した作品。潤濁もよく複雑な書線を生み出している。(仙草評)

(仙草評)

漢字 (静心書道会) 田中岳舟 「城東早春」



175×53cm

田中岳舟書

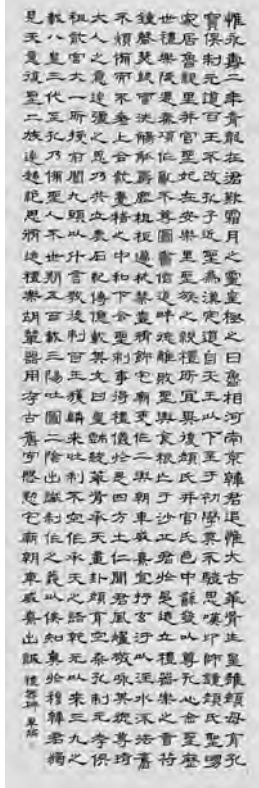
◆七言2句を三行で仕上げた。文字の大小変化をつけた作品だが小さい文字の動きが課題か、更なる飛躍を。(鄭街評)

◆ゆったりした、大胆な振幅と呼吸が作品の雄大さと繊細さを同居させている。少し曲線が目立つか？ (鄭雲評)

◆濃墨を生かし伸びやかな線が変化に富んで見応えのある作となった。落款の処理を工夫されたい。(仙草評)

◆作品映えのする字組のバランスでセンスを感じる。運腕大きく筆力も十分、より緩急に配慮されたい。(洋子評)

臨書 (紅瑤) 金井みどり 「礼器碑」



180×58cm

金井みどり臨

◆漢代の隸書の最高傑作と言われた礼器碑、整然と文字が並び余白もきき変化に富んだ美しい作品となる。(鄭街評)

(仙草評)

◆碑面を見るように正確に臨書され、臨書に取り組む真摯な姿勢が伺える。細字だが伸びやかである。(鄭雲評)

(洋子評)

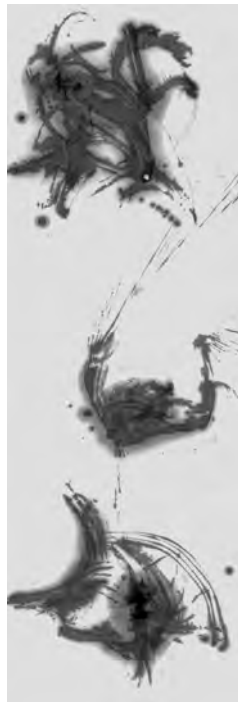
◆緻密に丁寧な原帖に寄り添い見事。一貫した息遣いに神々しさも漂う。特に波磔の自然さに惹かれた。(洋子評)

(鄭雲評)

◆原帖の特徴を細部までよく理解し、気力充実した見事な臨書作品。表現技術の高さが窺える。(仙草評)

(鄭街評)

前衛書 (書游会) 庄司咏艸 「芽生え」



180×60cm

庄司咏艸書

◆淡墨に白のバランスが美しい。造形の妙も想像力をかき立て、柔らかで爽やかなメロディを誘う。(洋子評)

◆淡墨を巧みに使い上から下へ余白のきいた快作になった。よく眺める程、墨溜まりに深い味わいを感じる。(鄭街評)

◆軽やかでリズムミカルな構成が心地よい。滲みもよく余白の美しさも魅力的に表現されている。(仙草評)

◆淡墨で余白を生かした表現。曲線の多い作であるが、太細や形、潤濁の変化を操り面白い。印の位置？ (鄭雲評)

創作の部(40点)	漢字	5点
かな	4点	
現代	14点	
篆刻	0点	
前衛	17点	
臨書の部(22点)	漢字	18点
かな	4点	
総出品点数	62点	

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

大雲 柿沼 彩香

〔かな〕

AI 藤村 昌子

〔現代詩〕

白珠 西山 葵龍

寿福 大作 優子

大拙 畠中 成山

〔前衛〕

篤伸 三浦 朱鳳

松風 西條 松雲

青蓮 白河 真帆

月華 中塩 朱華

紅瑤 佐藤 成美

〔臨書の部〕

〔漢字〕

澄春 新行内 芳蘭

樹原 紺野 遊山

澄春 土屋 恵仙

大雲 江本 興舟

〔かな〕

英峰 吉瀬 彩雨

AI 清水由紀子

書展

佐々木月光遺墨展

つきかけ

—たらちね—を観覧して

元砺波市美術館長 小野田裕司

会期 令和2年3月20日(金・祝)

3月22日(日)

会場 北日本新聞社

砺波支社ギャラリー

平成23年4月、思いがけず砺波市美術館長となった時、「青葉幼稚園に通っておられたころの館長さんを、知っていますよ」と、声をかけてこられたのが



「雅休のうた」黒田信一先生との合作

佐々木春子さんであった。高校を卒業し見習い教諭として勤務されていたのである。

今回の遺墨展では良寛さんの「日々日々又日々」が、まず目に留まり、岐阜県中津川の栗きんとんで有名な和菓子屋「すや」を思い出した。木曾げやきの大看板「すや」の2文字は良寛の「いろは」の書から拾ったという。

また、高校生の頃書かれたという、室生犀星作詞の現在は砺波高校である出町高等学校校歌。出町中学校の恩師黒田信一先生(画)との二人合作展の作品などもあり、楽しいひとときを過ごさせていただいた。



会場風景

※新型コロナウイルスの影響で「第13回粹仙会書作展 春夏」は中止と致しました。お詫び申し上げます。

粹仙会 代表 藤井龍仙

第13回 粹仙会 書作 春夏展

令和2年6月26日から
令和2年7月8日まで

後援：公益財団法人書道芸術院
協賛：筆匠古城園

毎年、初夏に粹仙会員の発表の機会として開催しています。今年から冬と夏の展覧会の回数を合算しています。こどもからご年配まで、仲良く愉しくやってみる教室のみなさんが日頃書いている作品の中から、よい、おもしろい、がんばった、みせたい、作品を展示しています。

シグラン緑井5F ギャラリー PASSEGE
9:00~24:00(最終日は20:00まで) 緑井駅 1分、中緑井バス停 1分
駐車場は無料で、直接エスカレーターホールに入れます

